國學院大學學術情報リポジトリ

「御＋形容詞」の発達について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2025-06-17 キーワード (Ja): 「御」, 形容詞, 尊敬語, 謙讓語, 美化語, 古文書 キーワード (En): 作成者: 山本, 久 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001730

「御＋形容詞」の発達について

山本 久

でたいことです。

(作例)

はじめに

形容詞に敬語接頭辞「御」が前接する「御＋形容詞」は、中世に発達し（【例1】）、現代共通語においても「お忙しい」「おめでたい」などとして使用される形式である（【例2】）。

【例1】「我身の事はいかでもありなん、君の御ため御心苦し」とて、ある暮がたに内裏を出でて、ゆくゑも知らず
うせ給ひぬ、（覚一本『平家物語』7590、4760）

【例2】学会設立五十周年を迎えられたのは、たいへんおめ

「御＋形容詞」については、歴史的な発達過程の整理と、現代共通語における実態の整理がともに行われている。本稿では、「御＋形容詞」の発達史のうち、「敬語発達史上の位置づけ」「用例の見られる各種資料の位置づけ」という、残された問題について検討する。

第一節 先行研究

第一項 「御＋形容詞」の發達史(二)——形態面から——

まず「御＋形容詞」の發達史を扱った先行研究を検討し、現段階の成果と課題をまとめる。

中村・大久保・碁石(二〇〇二)には、「形容詞・形容動詞に接頭語「御」を直接付けて尊敬の意を表す方法が、鎌倉時代以降發達しました」とする説明がある(三八三頁)。大きく言えば中世に起こった「御＋形容詞」の發達について、山田孝雄(一九五四)三九八―三九九頁に始まる先行研究が主な論点としてきたのは、「御心苦シ」のような「御＋名詞＋形容詞」に分解できるタイプ(複合型)、「御恋シ」のような分解できないタイプ(単純型)の二類のうち、後者がいつ成立したか、という点だった。単純型の成立時期については、『御湯殿上日記』、『平家物語』諸本、『とはすがたり』などの用例が指摘されてきたが(国田百合子(一九六四)、森野宗明(一九六四)、小松正(一九六七)、和田利政(一九六七)、近藤政美(一九七二)、近藤政美(一九七二)が古文書という転写を経ていない資料の用例を指摘したこと、一四世紀前半には成立していたことが

確実となった。近藤氏論文以降の専論は少ないが、『御伽草子』の用例を整理した坂詰力治(二〇〇八)もある。

これらの先行研究はいずれも重要な指摘を含むが、同時に、単純型/複合型という形態上の特徴に着目して、軍記物語・女房日記・古文書といった多様な資料から個別的に用例の報告を行ってきた、という一貫した特徴があるように感じられる。よって、(1)「御＋形容詞」の發達を、尊敬語・謙讓語といった敬語の機能上どのように位置づけられるか、(2)資料的性質にやや差がある各種資料の用例を、どのように関係づけて理解できるか、という点が残された課題だと考える。(1)の課題については次項と次節で分析の枠組みを示し、(2)の課題については(1)の検討を通して考えたい。

第二項 「御＋形容詞」の發達史(二)——敬語の機能面から——

形態面が議論の中心となってきた「御＋形容詞」の發達史を、敬語の機能からも扱った研究として、前項に挙げた和田利政(一九六七)、中村・大久保・碁石(二〇〇二)がある。

和田氏論文は、『とはすがたり』の「御＋形容詞」を詳細に検討する中で、「御＋形容詞」の敬語の機能には、「御オボツカナシ」など「感情の適用範囲」に対する敬意を表す「I型」(私

ハ×ガ御・形容詞」と、「御ワヅラハシ」など「その情態の所有者」に対する敬意を表す「Ⅱ型」（×ハ御・形容詞）の二種類があることを指摘する（四頁・【例4】【例5】）。

【例4】 などや（アノ東二条院マデガ退出ナサルノカ）など、

御おほつかなくおほえさせおはしまししほどに、

（『とはすがたり』五（和田氏論文例1））

【例5】（院ノ瘡ガ）今やおちさせおはしましぬと承ると思ふ

ほどに（再び）御わづらはしうならせおはしますとて、

（『とはすがたり』五（和田氏論文例6））

中村・大久保・碁石（二〇〇二）は、『源氏物語』、覚一本『平家物語』、『とはすがたり』、『住吉物語』から「御ユクリナシ」「御恋シ」「御イタハシ」「御ユカシ」を挙げ、「御ユクリナシ」はその状態の主格を高め、「御恋シ」「御イタハシ」「御ユカシ」は形容詞の「対象格に立つ人物を高め」るものとする。これをもとに、「御＋形容詞」の敬語の機能には、主格を高める「主格ガ、御＋状態を表す形容詞（・形容動詞）」と、対象格を高める「対象格ガ、御＋心情を表す形容詞」という二つの構造がある、という整理を行っている（三八三頁）。

ここで、両論文が共通して示唆しているのは、「御ワヅラハシ」「御ユクリナシ」の類と、「御オボツカナシ」「御恋シ」「御イ

タハシ」「御ユカシ」の類は、敬意の構造の差異が形容詞の語義（属性形容詞／感情形容詞）に対応する形で生じており、特定の敬意対象を高めるという点では連続性を持つ、という点である。このような把握の方法は、次節で述べる「御＋形容詞」の機能の全体像を理解するうえでの手がかりになるので、留意しておきたい。

そのうえで、和田氏が、『とはすがたり』の「御後ロメタシ」「御ムツマシ」などの数例がⅠ型・Ⅱ型の枠組みではやや捉えにくいことを指摘している（五頁）ように、「御＋形容詞」の敬語の機能の全体像を分析するには、より包括的な枠組みが必要となると思われる。

第二節 分析の枠組み

第一項 現代共通語における「お＋形容詞」の敬語の機能

本節では、現代共通語の「お＋形容詞」を対象とした先行研究を参照して、「御＋形容詞」の敬語の機能を整理し、「御＋形容詞」の発達を分析するための包括的な枠組みを示す。

現代共通語の「お＋形容詞」を扱った研究としては、敬語の全体像を明らかにする中で「お＋形容詞」に触れた菊地康人

(一九九七) 三五二〜三五三頁・三八一〜三八六頁、形容詞を用いた敬語を記述する中で「お+形容詞」に触れた細川英雄(一九九五)、日本語教育の観点から「お+形容詞」の実例と指導法を検討した村田志保(二〇一二)があった。これらを踏まえて「お+形容詞」の体系的記述を行った研究として、森山卓郎(二〇二〇)がある。

森山氏論文は、現代共通語の「お+形容詞」について、音韻・語構成・語種・文体などの条件から使用の適否を分析するとともに、敬語の機能上の整理を行ったものである。森山氏は、「お忙しい」などの「尊敬語」、「お懐かしい」などの「謙讓語」、「お久しい」などの「丁重語」の分類を挙げ、謙讓語の中に、「XはYがZ(感情評価的属性)の構造を持つ「お懐かしい」型、「対者を対象とした感情を述べる」「お恥ずかしい」型、「話者側を主語として対者へのマイナス属性を敬意と共に表す」「お聞き苦しい」型の三分を立てる(三四〜三五・三七頁)。また、「おめでたい」という「美化語」の区分も挙げている(三九九頁)。森山氏論文は、「お+形容詞」の敬語の機能の全体像を整理したものと重要である。特に、「美化語」や「謙讓語お恥ずかしい型」など中世前期以前には用例が稀な機能の位置づけが示されたことは、「御+形容詞」の発達史を考えるうえで大

きな示唆を与える。次項では、森山氏論文を受けて実例の収集を行った劉志偉(二〇二一)なども参照しつつ、森山氏の枠組みに若干の補足を加え、「御+形容詞」の機能についての稿者の理解を提示する。

第二項 「御+形容詞」の敬語の機能の整理

最初に、尊敬語と謙讓語お懐かしい型の区分を考える。森山氏や、その前提となる菊地康人(一九九七)は、敬意対象に対する主体の感情を述べる「お懐かしい」等を謙讓語として扱っている。ただし、劉氏が、「話し手側以外の人物とその関連事物に対する話し手側の心情的な見解を表す「お懐かしい」は寧ろいわゆる「尊敬語用法」に接近する」と指摘する通り(一四八頁)、お懐かしい型は敬意対象に対する評価、お聞き苦しい型とお恥ずかしい型は主体側に対する評価という差異があり、前者はこの点で尊敬語との連続性を持つ。

この「連続性」の実態を考えるうえで、前節で触れた和田利政(一九六七)、中村・大久保・碁石(二〇〇二)を振り返りたい。森山氏の枠組みを古典語の用例に適用すると、「御ユクリナシ」などは尊敬語、「御恋シ」などは謙讓語お懐かしい型に相当すると言えるが、両論文では、両者の敬意の構造の差異

が、属性形容詞／感情形容詞という形容詞の語義に対応したものであることが示唆されていた。このことは、感情形容詞と属性形容詞の中間に位置する語―中世に実例のある「御頼モシ」など―が、形式だけでは尊敬語とお懐かしい型のいずれに位置するか直観的に判断が難しく、個別的な検討が必要であることによっても裏付けられる。

ここから、尊敬語と謙讓語お懐かしい型の区分は、敬語の機能に明確な差異があるというより、前者は属性形容詞、後者は感情形容詞という語義の差異であり、語義に対応した形での連続性を持ったものとみなすことが考え得る。そして、このように考えると、尊敬語／謙讓語お懐かしい型の区分と、謙讓語内でのお聞き苦しい型／お恥ずかしい型の区分を、平行的に捉えることができる。お聞き苦しい型の形容詞の語義が属性形容詞であり、「お懐かしい」「お恥ずかしい」などの感情形容詞と対応されることは森山氏の指摘通りである(三五頁)から、お聞き苦しい型／お恥ずかしい型の区分も、やはり語義による差異であり、語義に対応した形での連続性を持ったものとみなすことが可能である。

すなわち、これら尊敬語・謙讓語は、まず(ア)評価の対象が敬意対象であるか主体であるか、によって、尊敬語・お懐か

しい型／お聞き苦しい型・お恥ずかしい型の区分ができ、そのうえで、(イ)形容詞の語義が属性形容詞であるか感情形容詞であるか、によって、尊敬語／お懐かしい型ならびにお聞き苦しい型／お恥ずかしい型の区分ができる、と考えた。

このように整理すると、お懐かしい型は、「謙讓語」よりも「尊敬語」と称する方が体系としては理解しやすい。名称に拘る必要性はないものの、本稿では、従来の尊敬語とお懐かしい型をいずれも「尊敬語」と呼ぶことにしたい。実際には、「御+形容詞」の「尊敬語」「謙讓語」と、一般に動詞述語の用法を指す「尊敬語」「謙讓語」とは機能上のズレがあるが、先行研究を継承して名称そのものは変えないことにした。なお、以上の整理は、素材敬語の「御」を、「御」の付く語が敬意対象か、主体か、という観点からシンプルに二分するものと言え、このような方法は「御+名詞」の区分にも有効なものとされている。「御+名詞」との平行性については第四節で触れたい。

次に、丁重語と美化語については、森山氏の言う対者的な敬意の有無という観点からの区別そのものは有効と考える。ただし、劉氏がこれらを「美化語」と一括して扱っている通り両者は連続的であること、近世以前は対者敬語の使用が近現代ほど義務的でなく、用例から対者的敬意の有無を判断することが容

易でない場合もあること、から、本稿ではこれらを広義の「美化語」とまとめて考える。そして、尊敬語・謙讓語と、美化語の区分は、敬意対象または主体が形容詞の主語として存在するか、という点で区分する。年月の経過や出来事の様子など、敬意対象でも主体でもないものが主語となる場合に、美化語とする。

以上をまとめて、「御＋形容詞」の機能の全体像について、本稿では次のように整理する。

○尊敬語お忙しい型：敬意対象の状態や行為に対する属性評価を表すもの。

【例 6】先生はお忙しいですか。 (作例)

○尊敬語お懐かしい型：敬意対象の状態や行為に対する感情を表すもの。

【例 7】先生のことがお懐かしいです。 (作例)

○謙讓語お恥ずかしい型：主体側の状態や行為に対する感情を表すもの。

【例 8】皆さまの前でお恥ずかしいです。 (作例)

○謙讓語お聞き苦しい型：主体側の状態や行為に対する属性評価を表すもの。

【例 9】お聞き苦しい発表で申し訳ありません。 (作例)

○美化語：敬意対象と主体のいずれへの評価でもないもの。

【例 10】今日もお暑いですな。 (作例)

【例 11】おめでたく新年となりました。 (作例)

第三節 「御＋形容詞」の発達史

第一項 一二世紀以前

本節では、前節で示した枠組みを用いて、「御＋形容詞」の発達史を検討していく。

なお、本節では、和文物語・軍記物語・狂言など、話し言葉の研究において使用されることの多い資料を通して大きな流れを把握する。古文書や室町期の女房日記の用例は、本節では扱わず、次節で改めて位置づけを行いたい。また、形態上の発達史については、第一節で挙げた近藤氏の結論に異論はなく、新たな知見を示すことはないが、必要な範囲で触れる。

まずは一二世紀以前の状況を検討していきたいが、この時期に問題となるのは、どこからを「御＋形容詞」として認めるか、という点である。この時期にも一見して単純型のように見える例があるが、これらは「御＋(形容詞語幹＋サ型)の名詞」(例 12)か、「御＋形容詞＋(敬意対象に関わる)名詞」(例 13)のいずれかであり、この点が「御＋形容詞」というカテゴリー

は未成立であることの根拠とされる（大岩正伸（一九六三）九七〜九八頁）。

【例12】父ノ御駿サモ皆知レリ、我レガ駿サニ等クハ有トモ、増ル事非ジ、
（『今昔物語集』五・二・三四四八）

【例13】公私にをこがましき名を弘めて、親の御亡き影を辱めむことのいみじさになむ、やがて世を棄てつる門出なりけり、
（『源氏物語』28950、17200）

一方で、形容詞語幹のサ型名詞や「形容詞＋名詞」の構造をとらず、複合型の「御＋形容詞」としての解釈が可能な例そのものは、この時期から散見する。

【例14】院は、あやしきまで御心ながく、仮にても見そめたまへる人は……方々につけて尋ねとりたまひつつ、あまた集へきこえたまへれど、
（『源氏物語』49910、28750）

【例14】のような例について、「御＋名詞＋形容詞」がいつ頃から「御＋（複合）形容詞」と分析されるようになったのかは不明だが、本稿では、形態・統語的に複合型として解釈が可能なのは、萌芽的なものとして整理の対象とする。整理の基準としては、（A）当該の「名詞＋形容詞」が『日本国語大辞典』に複合形容詞として立項され、かつ、当該時期の用例が挙げられており、（B）意味的に名詞のみを修飾する連体修飾部を伴

わず、「御＋形容詞」としての解釈が可能である、ものとする（一二世紀以降の複合型を整理する際も同様）。

この基準のもとで、この時期の「御＋形容詞」の敬語の機能を整理すると、全て尊敬語お忙しい型となった。資料、形容詞の種類、用例数は、本節末尾の【表1】に示している。

第二項 一三〜一四世紀

この時期には、「御＋形容詞」のカテゴリーが成立するとともに、尊敬語お懐かしい型と、謙讓語（お恥ずかしい型・お聞き苦しい型）が現れる。【例15】は、前齋宮に対し、そばに人が少ないことへの「イタハシ」という感情を表した、尊敬語お懐かしい型の例である。

【例15】今ぞおどろきて、「こは誰ぞ」と言ふ、「前齋宮のそばに」御人少ななるも御いたはしくて、御宿直は「べり」と答へば、
（『とはずがたり』1480、970）

なお、形容詞の語義が感情形容詞でも、敬意対象自身の感情を「〜」と思っておられる」とする例（【例16】）は、尊敬語お忙しい型とした。ただし、敬意対象Aが敬意対象Bを「〜」と存じておられる」とする例（【例17】）は、いずれへの敬意であるか厳密には不明である。本稿では、敬意対象Aと敬意対象Bとの

上下関係を親子・主従などに基づいて判断し、Aの方が高い場合はお忙しい型、Bの方が高い場合はお懐かしい型として、機械的に整理した。

【例16】《高倉上皇は》…：去年高倉宮のうたれさせ給ひ

し御有様、都うつりとてあさましかりし天下の乱、かやうの事ども御心苦しうおほしめされけるより、御悩つかせ給ひて、(覚一本『平家物語』7360_4630)

【例17】上皇は法皇の離宮、故亭幽閑寂寞の御住ひ、御心苦しく御覧じおかせ給へば、

(覚一本『平家物語』35890_16360)

次に、【例18】、【例19】は、「妊娠中の相手と関係を持つ」「宮中から追放される」という主体側の行為に対して、「後ロメタシ」「心苦シ」という感情を表したもので、謙讓語お恥ずかしい型と解釈できる例である。これらは、「後ロメタシ」「心苦シ」という感情が特定の敬意対象へ向けられる点でお懐かしい型との連続性が認められるが、主体側の行為が感情の契機となっているという点で、お恥ずかしい型と認定できるものである。このような、お懐かしい型と連続性のある使用法から、謙讓語が発生したものと思われる。

【例18】「かかる御身のほど《筆者が妊娠中であること》なれ

ば、《話者「雪の曙」から筆者に対して》つゆ御後ろめたきふるまひあるまじきを、年月の心の色をただのどかに言ひ聞かせむ」

【例19】(「とはずがたり」15920_10540)

【例1】(再掲)「我身の事はいかでもありなん、《自分が宮中から追放されることが》君の御ため御心苦し」とて、ある暮がたに内裏を出でて、ゆくゑも知らずうせ給ひぬ、(覚一本『平家物語』7590_4760)

さらに、【例20】は、主体(=「祝詞の師」)が神に対して仕える様子の属性を「御ムツマシ」と表したもので、お聞き苦しい型の初出と解釈できる例である。

【例20】祝詞の師といふは、「神にことさら御むつましく宮仕ふ者なり」といふが参りて、

(「とはずがたり」18970_12080)

第三項 一五〜一六世紀

一五〜一六世紀には、前代に引き続き、尊敬語と謙讓語がみられる。美化語の確例がまだみられないという点では一三〜一四世紀と同様だが、この時期には謙讓語にも形式の定着がみられる。【例21】のようなお恥ずかしい型の「御ハツカシ」は

一七世紀以降も引き続き用いられており、現代共通語の「お恥ずかしい」へとつながるものと言える。

【例21】おはづかしひ申事なれども、おんなのかけでいまま
で某は、らくくくとすぎて御ざるに、
(虎明本狂言3300、1380)

【例22】の「御ムツカシ」は、自らの依頼を「二面倒ながら…」と評価する、お聞き苦しい型の例である。「御ムツカシ」は、虎明本狂言には【例22】がみられるのみだが、近世後期の洒落本や人情本にも用例がある。

【例22】私がおととのかなぼうしが、此程さんくわづらひ
まらする程に、御むつかしなから御出なされて、か
ち有てくだされひ、
(虎明本狂言3940、2400)

第四項 一七〜一八世紀

網羅的な検討は今後の課題とするが、この時期になると美化語が確認できるようになる、という点のみ指摘しておきたい。

【例23】【例24】が、いずれも美化語の例である。

【例23】《正月の場面で》「ことし、こなたのや^② 仕合は残る
事なし、何事もおめでたい」といはふたり、
(『醒睡笑』八・三二六、16)

【例24】大道をありく^③に、知る人はたとあふ、「さても
お久しや」と詞をかけたれば、「御札の如く」と申け
り、
(『醒睡笑』三・九四七)

以上の結果を整理したのが【表1】である。一〇〜一二世紀頃の「御+形容詞」の萌芽的な例は尊敬語お忙しい型であり、一三〜一四世紀頃には尊敬語お懐かしい型とともに謙讓語（お恥ずかしい型・お聞き苦しい型）が現れ、一七世紀までには美化語も現れる。

第四節 「御+形容詞」の発達史と接頭辞「御」の発達史

第一項 「御+名詞」との平行性

以上の検討を踏まえて、第一節で挙げた、(1)「御+形容詞」の発達を、尊敬語・謙讓語といった敬語の機能上どのように位置づけられるか、(2)資料的性質にやや差がある各資料の用例を、どのように関係づけて理解できるか、という問題に立ち返りたい。

まずは(1)について考える。前節の結果から知られることは、「御+形容詞」の機能上の発達過程が、「御+名詞」の発達

と同様の過程をたどっている、という点である。

大塚光信(一九六六)は、中世後期の「御」の特徴について、ロドリゲス『日本大文典』に挙げられる「私の御馬一匹進じそろ」を例に、「聞手を考慮するうえにたつて、元来は話主に属するものまで「御」で待遇するという、いわば「御」の丁寧語の性格への移行」が見られることを指摘する(四三頁)。また、青木博史(二〇一八)も、「ゴザル」が尊敬語から丁寧語の機能を生じる過程について、「御」+「座+有ル」という語構成を背景として「御+名詞」と同様の変化を経たことを想定し、「ソトの人物」に対して使用する尊敬語から、「ウチの人物」に対して使用する謙讓語を経て、さらに聞き手への配慮を示す丁寧語への拡張が起こったことを明らかにしている(一六四―一六八頁)。

本稿で検討してきた「御+形容詞」についても、敬意対象に対する評価である尊敬語(お忙しい型)が最初に現れたのち、お懐かしい型を介して、主体側に対する評価である謙讓語(お恥ずかしい型・お聞き苦しい型)が現れたという点で、「御+名詞」や「ゴザル」と同様の過程を経ていることがわかる。また、美化語「御+名詞」の具体的な成立過程にはなお検討を要する点も多いが、美化語成立の前提となる、名詞そのものを敬

意の対象とする「自体尊敬」の用例は一一世紀には存在しないこと(吉田永弘(二〇〇八)、美化語の確例は一四―一五世紀に早い例があること、が指摘されている(大久保一男(二〇〇九))。この時期に素材上の敬意対象を必要としない「御」が現れるという点で、美化語の「御+形容詞」の発達も、「御+名詞」と同様の過程をたどっている。意外性のある結論ではないが、第二節の整理を行ったことで、「御+形容詞」の発達史もシンプルに把握することができた。

第二項 古文書・室町期女房日記における「御+形容詞」

さらに(2)について考えたい。そのために、前節で用例が見られた形容詞に絞って、古文書、室町期の女房日記にみられる「御+形容詞」の用例とその敬語の機能を整理する。結論を先に述べると、これらの資料の用例は、前項で述べた過程を裏付けると同時に、この過程の一段階具体的な様相を示しているという点から位置づけが可能であると考える。

古文書の「御+形容詞」の確例は一三世紀後半頃に現れる。『鎌倉遺文』に仮名書き例があるものに、「御イタハシ」(例25)「御イトホシ」「御嬉シ」「御恨メシ」「御羨マシ」「御後口暗シ」「御オボツカナシ」「御心苦シ」「御心元ナシ」「御心安シ」(例

【表1】 一一八世紀の「御+形容詞」まとめ

時代	資料	尊敬語		謙讓語		美化語
		お忙しい型	お懐かしい型	お恥ずかしい型	お聞き苦しい型	
10c ～ 12c	竹取物語	心地悪シ1				
	蜻蛉日記	気色悪シ1				
	源氏物語	心地悪シ1 心憂シ1 快シ2 心長シ1 気色悪シ2 心清シ1 心長シ1 権良シ2 仲良シ3				
13c ～ 14c	今昔物語集	気色悪シ1 心サガ無シ1 仲悪シ1 仲良シ1 心賢シ1 年若シ1				
	保元物語	心憎シ1 心細シ4 心弱シ1 罪深シ1 仲悪シ1				
	平治物語	心モトナシ1 心安シ1				
	第一本平家物語	気色悪シ2 心苦シ2 心安シ6 快シ1 心弱シ2	イタハシ1 後ロメタシ1 心苦シ3 恋シ2 名残惜シ1	後ロメタシ1 心苦シ1		
	延慶本平家物語	気色悪シ2 心苦シ3 心慥シ3 心強シ1 心長シ1 心細シ2 心モトナシ1 心安シ1 快シ3 心弱シ5 年若シ2 名残惜シ2 情深シ1 人悪シ1 身近シ4 物狂ハシ1 気色悪シ3	心苦シ2 名残惜シ2	後ロメタシ1 面目ナシ1	ムツアシ1	
15c ～ 16c	とほすがたり	幼シ1 類ラハシ3	イタハシ2 恨メシ1 オホツカナシ1 心苦シ2 名残惜シ1 名残多シ2 ユカシ1	後ロメタシ1 面目ナシ1		
	徒然草	気色悪シ1				
17c ～ 18c	御伽草子	嫌シ1 心苦シ1 心深シ1 心安シ4 ソハ近シ2 名残惜シ2 懐カシ1 身近シ1	イタハシ6 恨メシ1 心モトナシ1 懐カシ1 名残惜シ4 懐カシ1	嫌シ1 恥ツカシ1		
	天草版平家物語	心苦シ1 心安シ2 頼モシ1 近シ1	イトハシ1 イトホシ2 恋シ2 イトハシ1 イトホシ2 恋シ2 イトハシ1 義アシ1 頼モシ1 懐カシ1 残り多シ1	恥ツカシ3 面目ナシ1	ムツカシ1	
17c ～ 18c	虎明本狂言	忙(ハ)シ3 心安シ4 寂シ1 情ケナシ3 心安シ1 頼モシ1 仲良シ1	イトハシ1 ショウシ1 情ケナシ2 待子遅シ1 珍シ1 ムデナシ4 優シ1 若シ1	イト(ホ)シ9 名残惜シ2 懐カシ1 残り多シ2 ユカシ1	嫌シ4 恥ツカシ5	ムツカシ1 ムツカシ3
	近松浄瑠璃					ムツカシ2 ムツカシ1 ムツカシ3

26)「御恋シ」「御頼モシ」「御名残惜シ」「御名残多シ」「御ユカシ」「御幼シ」がある。文意を汲みがたい例も多いが、尊敬語と解して問題ない例が大半である。

【例25】大乳母久御わたり、御いたわ^{〔註〕}しく候とて、とくかへされて候、(金沢文庫文書・徳治三(三三二六)年(頃)正月一七日金沢貞顕書状(鎌倉遺文)三八・二九三三三)

【例26】此勞今者複^{〔註〕}本候へハ、御心安可被思食候之由、申とて候、

(金沢文庫文書・(一四世紀前半) 円海書状(鎌倉遺文)三四・二五九五五)

一五〜一六世紀には謙讓語が発達し、お恥ずかしい型の「御恥ツカシ」(【例27】)や、お聞き苦しい型の「御ムツカシ」(【例28】)などが現れる。「言繼卿記」紙背文書(「史料纂集」刊行分)には「御ムツカシ」が四二例、「御恥ツカシ」が八例と、多く使用されている。

【例27】みたてなさ御はつかしく候なから、一か二いろ、ま
いり候、(「言繼卿記」紙背文書・(一六世紀前半)女
房消息(享祿二年三月四〜六日紙背))

【例28】御六借敷事候へ共、此歌なをされ候てくたされ候ハ、

祝著千万存候へく候、(「言繼卿記」紙背文書・(一六世紀中盤)高倉永綱書状(天文五年正月五〜七日紙背))
美化語「御メデタシ」「御久シ」も一五〜一六世紀にみられる。

『御湯殿上日記』の「御メデタシ」二四例は、尊敬語とも美化語とも解せる例が多いが、【例29】など「宮中の行事の様子」が主語となる四例は美化語と考えてよいだろう。「言繼卿記」紙背文書にも、「歳暮のよろこび」を「御メデタシ」と述べる、明確に美化語と解せる例が一例あった(【例30】)。

【例29】雨ふる、御樂はしめ、するくと御めてたし、

(『御湯殿上日記』延徳三(一四九一)年三月一七日条)
【例30】歳暮之御慶、千秋万歳、御日出候、

(「言繼卿記」紙背文書・(一六世紀中盤)中時具書状・
天文一三年九月二三〜二五日紙背)

また、「御久シ」の例は僅少で、【例31】は管見に入ったこの時期唯一の確例だが、美化語「御久シ」の初例として貴重である。美化語は、前節の整理では「醒睡笑」を初出とするが、これを遡る一五〜一六世紀には成立していたことがわかる。

【例31】をのくとおとな中へも、御久しきよし、おそれなからたのみたてまつり候、

(伊達家文書・文祿三(一五九四)年二月二五日伊

達政宗書状（「大日本古文書」『伊達家文書』二巻
六五九号）

第三項 古文書・室町期女房日記の用例の位置づけ

さらに、古文書や室町期女房日記の例の特徴は、尊敬語や、それに非常に近い「御メデタシ」「御久シ」の例が見られ、美化語が発生する過程が具体的にうかがえるという点である。

【例32】の「御メデタシ」は、一条実材が後光厳天皇の御筥始に呼ばれたことを、筥の師匠の豊原龍秋が祝したもので、尊敬語とみられる。【例32】をはじめ、「園太暦」収載文書に二例、『中院一品記』紙背文書に二例、『後愚昧記』収載文書に一例ある一四世紀の「御メデタシ」は、敬意対象の様子や境遇を表した尊敬語と解せる例が多く、少なくとも「出来事の様子」「年月の経過」を表した美化語の確例はない。「御久シ」はやはり僅少だが、管見の限り早い例である【例33】は、「後土御門天皇の服する葉の数が少ないという状況が久々であること」を表したもので、本稿の分類上は美化語に属するものの、「敬意対象に関係する時間の経過」について述べているという点で、尊敬語との連続性を強く感じる例である。

【例32】 上さま御しこの御事申され、御くわんちやう（兼加）

のしるし、御すき御けいこの御ゆへ、御みやうか（兼加）
返々御めてたくおほえさせおはしまし候、

（『園太暦』延文三（一三五八）年八月一四日条・豊原龍秋書状）

【例33】 あんせん寺殿としみち、御くすりにて、「こよひは御久しく御かすすくなき」よし、御申あり、

（『御湯殿上日記』延徳二（二四九〇）年二月三日条）

さて、美化語が成立する具体的な過程について、現代共通語を対象とした井上史雄（二〇一二）の検討がある。井上氏は、「お金」「お茶」など現代共通語の美化語について、「ある時点での多くの語の調査結果は、言語変化の発生初期、普及初期、最大普及期、普及後期、末期など様々な段階を示す可能性がある」という見通しのもと、アンケート調査を通して美化語の成立過程を検討している。井上氏は、「お」には、中高年女性が使用を始める「つけすぎ」、男性・女性とも子ども相手に使用する「幼児語」、男性・女性とも目上相手の事物を指すために使用する「尊敬語」（または目上相手に自分の事物を指すために使用する「謙讓語」、女性が事物の所有者に関わりなく使用する「女性語」、女性の使用傾向に男性が合わせる形で普及する「美化語」の五段階があり、同一の形式が「つけすぎ」↓「尊

敬語」↓(場合によって「謙讓語」)↓「女性語」↓「美化語」、または「つけすぎ」↓「幼児語」↓「女性語」↓「美化語」という流れを循環することで、美化語が成立する、と述べている。

井上氏の想定する過程が一五〜一六世紀の「御」にもそのままあてはまるかどうかは、井上氏の言う「尊敬語」「美化語」と本稿の用語の意味が異なることに留意しながら、なお慎重に考えていく必要があるだろう。そのうえで、ある「御」の形式が敬意対象を伴わない用法として定着するまでには、敬意対象の事物を指す用法の段階を経ることがある、という観点は参考になる。辻村敏樹(一九六八)にも、美化語の成立について、「話し手が、できるだけ丁寧にとり意識から、本来、尊敬すべき対象について用いるべき敬称、謙遜すべき対象(≡自己側)に用いるべき謙称を、対象そのものから離れて、それに関係あるもの、更にまたこれに関係あるものへというように広げて用い、段々一般的なものにまで及ぼしてしまったところから起こったものと思われまます」と指摘されている(六一頁)。

このような観点からみると、【例32】【例33】のような例は、「御メデタシ」「御久シ」が一五〜一六世紀に美化語として定着する以前に、尊敬語として使用される段階を経ていたことを示す例として位置づけられる。古文書や女房日記には、相手へ

の配慮や品格の保持などの動機から「御+形容詞」が豊富に使用されることによって、一四〜一五世紀の話し言葉の過渡期的な状況が現れているのだろう。

おわりに

本稿の示した「御+形容詞」の発達史、さらにそれを含む敬語接頭辞「御」の発達史は、森山由紀子(二〇〇三)の提唱する「尊者定位から自己定位へ」(二二二頁)という、敬語史の大きな流れに沿ったものと言える。同時に、このような流れに位置づけられる個々の現象の具体的な様相については、古文書や日記といった、話し言葉の歴史を考える際には周辺の資料も視野に入れながら、一層の検討を行う余地が残っていそうである。

注

(1)「御」によって表されている形態素(「オホン・オン・オ」/ゴ/ギョ/ミ)ならびに語形(「オホン/オン/オ」)は、統語的・意味的な共通性をもとに、本稿では特に考慮しない。ただし、形態素としては基本的に「オホン(オ/オン/オ)」を想定するとともに、音声上は「オ

ホン→オン→オ」へと変化したものとみなし、この変化は本稿で論じる統語的・意味的な変化とは関わりないものと考ええる。

- (2) 一三世紀以降は「御＋形容詞」というカテゴリーが成立しているため、「例18」のような「御＋形容詞＋名詞」の形式を排除することはしていない。この点、一二世紀以前の扱いとの一貫性が問題となるが、「例13」のような一二世紀以前の「御＋形容詞＋名詞」（源氏物語）に七例）は、全て敬意対象の状態について述べたものであり、第二節の枠組みで言えば尊敬語お忙しい型に類似する。よって、本節で述べる「御＋形容詞」の変化の過程に影響を及ぼすものではない。

- (3) 「お目にかかってくるはしくおはなし申たいことがございますが、どうぞおむづかしくもお逢なさせていただきますし」（『春色梅児与美』4600.2870）など。

文献

- 青木博史（二〇一八）「じごる」の丁寧語化をめぐる。青木博史・小柳智一・吉田永弘（編）『日本語文法研究 四』ひつじ書房
- 井上史雄（二〇二二）「美化語「お」の循環過程と幼児語の「お」』『明海大 学外国語学部論集』二四
- 大岩正伸（一九六三）「御」用法と意味——『国語学』五二
- 大久保一男（二〇〇九）「私のお気に入り」『国学院雑誌』一一〇・一二
- 菊地康人（一九九七）『敬語』（『講談社学術文庫』二二六八）講談社
- 国田百合子（一九六四）『特集 国語学—新資料の紹介と論究 敬語接頭辞と動作語・形容語との融合』『文学・語学』三三三
- 小松正（一九六七）「平家物語を中心とした接頭語「御」』『文芸研究』六一
- 近藤政美（一九七〇）「平家物語語本における形容詞の敬讓表現について」『説

林 一九

（一九七二）「鎌倉時代における形容詞の敬讓表現について——金沢文庫古文書を中心にして——」『名古屋大学国語国文学』三〇号

坂詰力治（二〇〇八）「御伽草子に見る室町時代語の様相——形容詞を中心に——」『近代語研究 二四』武蔵野書院

辻村敏樹（一九六八）『敬語の史的研究』東京堂出版

中村幸弘・大久保一男・碇石雅利（二〇〇二）『古典敬語詳説』石文書院

細川英雄（一九九五）「形容詞・副詞の敬語法——評価性形容詞にふれて——」『国文学 解釈と教材の研究』四〇・二四

村田志保（二〇二二）「形容詞の敬語表現と接頭辞「お／ご」の関連性について——日本語教育初級レベルでの導入を目指して——」『人間文化研究』一八

森野宗明（一九六四）「鎌倉時代の敬語二題——「御」の形容詞直接用法と「申せし」型接統形式と——」『金沢大学教養部論集』一

森山卓郎（二〇二〇）「形容詞の敬語——お＋形容詞——を中心に——」『国文学研究』一九一

森山由紀子（二〇〇三）「謙讓語から見た敬語史、丁寧語から見た敬語史——「尊者定位」から「自己定位」へ——」菊地康人（編）『敬語』（『朝倉日本語講座』八）朝倉書店

山田孝雄（一九五四）『平家物語の語法』宝文館

吉田永弘（二〇〇八）「源氏物語の「御」——自体尊敬の存否——」『国学院雑誌』一〇九・二〇〇

劉志偉（二〇二二）「コーパスデータに基づく形容詞の敬語に関する一考察——」『埼玉大学紀要 教養学部』五七・一

和田利政（一九六七）「とはすがたり」の敬語——御〓形容詞・覚え給ふ——」『国学院雑誌』一六八・二二号

利用資料

※用例収集に利用した資料を(◇)として記す。『竹取物語』・『蜻蛉日記』・『落窪物語』・和泉式部日記・『源氏物語』・『大鏡』：国立国語研究所(二〇二二)『日本語歴史コーパス 平安時代編Ⅰ仮名文学』(短単位データ13)長単位データ13(検索はキー・品詞→大分類→形容詞、前方共起1(キーから1語)・語彙素→「御」、ならびにキー・品詞→大分類→形容詞、前方共起1(キーから1語)・品詞→大分類→名詞、前方共起2(キーから2語)・語彙素→「御」による。以下同様)、『今昔物語集』(天竺部・震旦部)：『日本古典文学大系』、『今昔物語集』(本朝部)・宇治拾遺物語・『十訓抄』・『徒然草』：国立国語研究所(二〇一六)『日本語歴史コーパス 鎌倉時代編Ⅰ説話・随筆』(短単位データ1)長単位データ1)、『とはずがたり』：国立国語研究所(二〇一七)『日本語歴史コーパス 鎌倉時代編Ⅱ日記・紀行』(短単位データ10)長単位データ10)、『保元物語』・『平治物語』・『覚一本』『平家物語』：国立国語研究所(二〇二二)『日本語歴史コーパス 鎌倉時代編Ⅲ軍記』(短単位データ10)長単位データ10)、『延慶本』『平家物語』：北原保雄・小川栄一(編)(一九九〇)『延慶本平家物語 本文篇(上)下)』勉誠社、『御伽草子』：『日本古典文学大系』天草版『平家物語』：国立国語研究所(二〇二四)『日本語歴史コーパス 室町時代編Ⅱキリシタン資料』(短単位データ1)長単位データ1)、『虎明本狂言』：国立国語研究所(二〇一六)『日本語歴史コーパス 室町時代編Ⅰ狂言』(短単位データ1)長単位データ1)、『醒睡笑』：『笠間索引叢刊』、近松浄瑠璃：国立国語研究所(二〇二〇)『日本語歴史コーパス 江戸時代編Ⅲ近松浄瑠璃』(ver.1.0)、『春色梅尼与美』：国立国語研究所(二〇一九)『日本語歴史コーパス 江戸時代編Ⅱ人情本』(ver.08)、『鎌倉遺文』(一)～(四)巻・『補遺編』(一)～(四)巻・『東寺文書』(一)～(二)巻・『大日本古文書』(伊達家文書)一～一〇巻、『中院一品記』紙背文書、『後愚昧記』収載文書(◇)『東京大学史料編纂所データベース』、『園太暦』

収載文書…『史料纂集』(◇)Japan Knowledge)、『言継卿記』紙背文書…『史料纂集』、『御湯殿上日記』…『群書類従』(◇)Japan Knowledge) [付記] 本編はJSPS科研費24K10587の助成を受けたものである。